



## バックナンバー 3 : Vol.021 ~ Vol.030

- Vol. 021 海の向こうの日本文化 - その価値と活用を考える -  
人間文化研究機構 総合情報発信センター研究員 菊池百里子
- Vol. 022 そうだ人文機構、行こう — 外来研究員アンドルー・ハウエンさんの場合
- Vol. 023 そうだ人文機構、行こう — 外来研究員ヘレナ・チャプコヴァーさんの場合
- Vol. 024 インタビュー・シリーズ③『田窪行則 国立国語研究所新所長』  
インタビュアー 人間文化研究機構 立本 成文
- Vol. 025 そうだ人文機構、行こう — 外来研究員オレグ・ベネシュさんの場合
- Vol. 026 そうだ人文機構、行こう — 外来研究員ランス・パーシーさんの場合
- Vol. 027 そうだ人文機構、行こう — 外来研究員ジョー・マッカラムさんの場合
- Vol. 028 年号と改元についておさえておきたい5つのこと
- Vol. 029 第2回 AHRC 関係者懇談会
- Vol. 030 2025年の大阪・関西万博誘致に向けて知っておきたい5つのこと



## Vol. 021 海の向こうの日本文化 - その価値と活用を考える -

シーボルトが日本で収集し、ヨーロッパに持ち帰った膨大な美術工芸品など、海外の研究機関等には多くの日本の歴史的資料が収蔵されています。これらの日本関連在外資料の調査研究をすすめるため、人間文化研究機構では、[日本関連在外資料調査研究・活用事業](#)として4つの研究プロジェクトと、これら研究成果の活用促進をはかる統括班を立て、研究を推進しています。

この事業では、海外にある日本関連の史資料の存在を日本国内でも知ってもらい、関係する地域で活用していく方策を考えるシンポジウム、「[海の向こうの日本文化 - その価値と活用を考える -](#)」(第30回人文機構シンポジウム)を2017年6月3日、九州大学西新プラザで開催しました。

シンポジウムでは、冒頭で統括班の稲賀繁美教授(国際日本文化研究センター)から各プロジェクトの紹介があったのち、4つの在外プロジェクトの成果のうち、九州各地に関係する最新の研究成果の講演がありました。

最初に、ハーグ国立文書館所蔵平戸オランダ商館文書の調査研究成果からオランダ人と平戸の人々との最初の出会いと友情について紹介したフレデリック・クレインス准教授(国際日本文化研究センター)の講演がありました。続いてバチカン図書館所蔵マリオ・マレガ収集文書にある江戸時代の禁教政策関連文書の紹介と、その研究の展望について大友一雄教授(国文学研究資料館)の講演がありました。その後、シーボルトが収集した長崎くんちの船頭衣装の調査研究から、その製作年代と歌舞伎衣装との関係について澤田和人准教授(国立歴史民俗博物館)の講演がありました。最後に、アメリカ大陸に移住した日本人らによって継承された日本の言語文化とその特徴について朝日祥之准教授(国立国語研究所)の講演がありました。

パネルディスカッションでは、パネリストとして稲賀繁美教授のほか、佐野真由子教授(国際日本文化研究センター/長崎県立大学)、岩崎義則准教授(九州大学)、佐藤晃洋課長(大分県文化課)、河野まゆ子主任研究員(JTB総合研究所)ら研究者や行政、観光業界関係者が、司会として菊池百里子研究員(人間文化研究機構)が登壇しました。日本関連在外資料の日本における学術的位置づけや、世界的な価値を持つ資料を地方の魅力として発信することの重要性、観光資源として活用するときのポイント、そして研究成果と社会とを繋ぐ学芸員の重要性など、多方面から研究成果の発信、共有のあり方について、また地域振興に資する研究成果の活用する方法についてともに考えました。

このシンポジウムの様子は、[YouTube](#)で視聴できます。



人間文化研究機構

総合情報発信センター研究員 菊池百里子



シンポジウムの様子



## Vol. 022 そうだ人文機構、行こう

### ー 外来研究員アンドルー・ハウエンさんの場合

人間文化研究機構（人文機構）では、2007年に英国の助成機関である、[芸術・人文リサーチ・カウンシル（AHRC）](#)と覚書を締結し、日本研究を志す英国の大学院生や若手研究者を本機構の研究機関で受入れて、研究指導を行っています。今回は、2013年に[国文学研究資料館（国文研）](#)で受け入れた、アンドリュー・ハウエン氏に、ご自身の研究活動についてお話を伺いました。現在ハウエン氏は、日本学術振興会（JSPS）の外国人特別研究員として東京女子大学で研究活動に取り組んでいます。

#### 現在の研究課題や取り組んでいるプロジェクトはどのようなものですか？

私の研究分野は比較文学、具体的には英語と日本の詩の比較研究です。現在は、JSPSの助成を受けて米国の作詩家エズラ・パウンド（Ezra Pound）と日本の関係をまとめた図書の出版プロジェクトに取り組んでいます。パウンドは、20世紀の最も著名な英語圏の詩人の一人であり、彼が日本文学に与えた、そして日本文学から受けた影響について研究しています。

#### 5年後、そして10年後、あなたは何をしていますか？

5年後、日本の大学で准教授として教壇にたっていたら、と思います。また、それまでにさきほどの出版プロジェクトで図書を出版し、この分野の学術論文をいくつか執筆してきたらと思います。そして今後の10年間で、日本で、もし難しいならどこかよその国で、常勤の研究職をみつきたいです。

#### 国文研で研究を開始する最初の日に、知っておきたかったことは何ですか？

国文研のスタッフはとても親しみやすく、親身になって受け入れてくれました。研究面でも、研究所では何の不具合もありませんでした。

#### 外来研究員として日本に滞在し、最も記憶に残った出来事は何でしたか？

最も記憶に残っているのは、副所長の谷川先生、研究員の根岸先生が、日本の近代詩の著名な評論家、和田先生と一緒に、私に神田の古本屋街を紹介してくださり、詩の本を探してくださったことです。私自身の専門分野でリーダ的存在の研究者と接点を持ったことは、私の研究にとって多くの有益な「つながり」をもたらしてくれました。そしてそのことは、たとえば英詩と日本現代詩といった異なる研究分野間の対話という、実にすばらしい機会を提供してくれます。

#### 外国で研究しようとしている学生や若手研究者にアドバイスをお願いします。

みなさんへの私からのアドバイスは、外国にいる間にできるだけ多くのコネクションを作ることです。あなた自身の研究分野にかかわる見識を広げることができますし、あなたの研究活動に実に有益なものになると思います。

#### アンドルー・ハウエン博士

現在、東京女子大学のJSPS外国人特別研究員として来日中。英国で育ち、オックスフォード大学で修士号、レディング大学で博士号を取得。現在、エズラ・パウンドと日本文学との関係に焦点を当てた研究プロジェクトに取り組んでいる。このプロジェクトは、The Review of English Studies - Volume 65（2013年、オックスフォード大学出版）に掲載されたハウエン氏の論文「Ezra Pound's Early Cantos and his Translation of Takasago（エズラ・パウンドの早期詩編群と『高砂』の翻訳）（2014年のエズラ・パウンド協会賞受賞）に基づいて構想されたものである。他に、バジル・バンティングによる鴨長明の『方丈記』の翻訳に関する査読論文やThe New Ezra Pound（ケンブリッジ大学出版）の中の「エズラ・パウンドと日本文学」の章を分担執筆している。

余暇には、読書、街中探索、美術館・博物館見学、山間のハイキングを楽しんでいる。





## Vol. 023 そうだ人文機構、行こう

### ー 外来研究員ヘレナ・チャプコヴァーさんの場合

人間文化研究機構（人文機構）では、2007年に英国の助成機関である、芸術・人文リサーチ・カウンシル（AHRC）と覚書を締結し、日本研究を志す英国の大学院生や若手研究者を本機構の研究機関で受入れて、研究指導を行っています。今回は、[国際日本文化研究センター](#)（日文研）で受け入れたヘレナ・チャプコヴァー氏に、ご自身の研究活動や外来研究員としてのご経験についてお話を伺いました。チャプコヴァー氏は、現在、早稲田大学の助教として美術史を教えています。

#### 現在の研究課題や取り組んでいるプロジェクトはどのようなものですか？

2012年に博士の学位を取得して以来、私は、ヨーロッパや在日外来研究員としての研究期間に温めてきた研究プロジェクトやアーティストとのネットワークを広げ続けて活動しています。今は、1920年代、1930年代の日本および中欧における越境的な表象文化に関心があります。

現在進行中の研究プロジェクトを1つご紹介するならば、日本人とバウハウスとの接点に関する研究です。この研究プロジェクトは最近、「[バウハウス 100 / バウハウスイマジニスタ](#)」と呼ばれる大規模な国際プロジェクトの一つに組み込まれることになりました。この国際プロジェクトによって、バウハウスに触発された現代日本のデザインの歴史が国際的に知られるきっかけになるので、非常に興奮しています。

#### 5年後、そして10年後、あなたは何をしていると思いますか？

私が大好きな、美術史や日本学の研究プロジェクトの発展や教育活動に従事していきたいと思います。

#### 日文研で研究を開始する初日に、知っておきたかったことは何ですか？

私はもっとリラックスして、ゆったりと構えていればよかったと思います。日文研は、若い研究者にとって本当に活気にあふれた刺激的な場所です。外来研究員の間は稲賀先生が指導してくださいました。大変素晴らしい方で、たくさん支援してくださいました。

#### 外来研究員として日本に滞在し、最も記憶に残った出来事は何でしたか？

いくつかありますが、一番鮮明に覚えているのは、チェコの建築家であるベドジフ・フォイエルシュタインから、日本人建築家である土浦夫妻への書簡を発見したことです。このような記録が個人であつめたコレクションに現存するとは思っていませんでしたので。私が手紙の写しを入手できたのは、仲介、支援してくれた同僚達がいたからです。とりわけ、日本では人脈が重要であり、人を介して、よい方と知り合えたことが書簡の発見につながったと思います。

#### 外国で研究しようとしている学生や若手研究者にアドバイスをお願いします。

前出の回答にあるとおり、人脈を広げることです！外来研究員のような若手研究者は、さまざまな研究者に紹介してもらえる最高の立場です。こういった機会をとらえて、人的なネットワークを作ることが、将来のキャリアを形成する上でも必要不可欠だと思います。

#### ヘレナ・チャプコヴァー助教

ヘレナ・チャプコヴァー氏は、助教として早稲田大学国際教養学部で美術史を教えています。チャプコヴァー氏は、戦時期に日本と中欧との間を結ぶことに貢献した、アーティスト間の交流を中心に研究しています。このほか、多国籍間ビジュアルアート研究、ジャポニズム、モダニズム、20世紀建築、デザインと写真などにも関心があります。チャプコヴァー氏は、学部から修士課程までは、チェコスロバキアのチャールズ大学と英国のSOAS（ロンドン大学東洋アフリカ研究学院）で美術史と日本学を学び、博士号はロンドンの芸術大学のTrAIN（Transnational Art Identity and Nation）研究センターで取得しました。



チャプコヴァー氏の著作には、Transnational networkers - Iwao and Michiko Yamawaki and the formation of Japanese Modernist Design (2014) や、“Bauhaus and tea ceremony: a study of mutual impact in design education between Germany and Japan in the interwar period”Eurasian Encounters: Intellectual and Cultural Exchanges, 1900-1950 (2016) など、モダニズムにおける新教育運動の役割に焦点を当てたものがあります。また、チャプコヴァー氏はチェコの純粋主義の建築家であり、前衛的な舞台建築家であるベドジフ・フォイエルシュタインと日本の関係に関する著書、Bedich Feuerstein - Cesta do nejvýtvárnější země světa, (Kant/Aula, Praha, 2014) を執筆しています。

チャプコヴァー氏の休日の楽しみは、日本人の友人らと展覧会や劇場に行くことです。



## Vol. 024 インタビュー・シリーズ③

### 『田窪行則 国立国語研究所新所長』

インタビュアー 人間文化研究機構長 立本 成文

国立国語研究所（以下、国語研）では、2009年に独立行政法人から大学共同利用機関法人に移管されて以降、2017年まで8年間所長を務めた影山太郎氏が退任し、2017年10月より田窪行則氏が新所長に就任しました。

国語研は、今年創立70周年を迎えます。開所以来、様々な地域、また時代にわたる日本語のあり方を把握・記録するとともに、資料として整備し、データベースとして提供してきました。このような、長期にわたる基礎研究を積み重ね、充実させていくとともに、大学共同利用機関として、6年単位の中期目標・中期計画による短期的な成果をいかに発信していくのか、人文機構長が新所長に抱負を伺いました。



#### 1. 法人第3期における抱負と見通し

（立本） 国語研は独立行政法人から大学共同利用機関法人への移管という大変な試練を経て、8年間で世界に誇れる言語研究機関になったと、私どもは認識しておりますが、田窪所長はどのように評価されていますか。

（田窪） そうですね。独立行政法人時代は非常に立派な仕事がたくさん出て、世界に誇れるようなものが幾つもあったと思いますが、残念ながら海外に向けた研究成果の発信はあまりやってこられなかったようです。影山前所長になってから、その部分を直そうということで、影山前所長ご自身も英語が堪能だということもあって、非常に多くの英文の刊行物を出されて、国際的な評価は非常に高まっていると思います。

（立本） 2016年度から始まった法人第3期中期目標・中期計画期間もあと残り4年というところですが、この第3期中の抱負を教えてください。

（田窪） 国語研は、今年の12月で創立70周年を迎え、再来年度の10月1日には大学共同利用機関として10周年を迎えます。ですから、10周年と70周年を併せて、さまざまな催し物を半年ぐらいかけて開催します。独立行政法人時代の国語研も含めて、これまでの国語研を総括して、将来に向けて歩き出すというふうなことを考えて、今、計画中です。

(立本) そうですか。ではその創立記念の催し物も含めて、影山前所長が掲げた第3期の目標を遂行していくということですね。

(田窪) そうですね。第3期は半分ぐらい、私は運営委員として関わっていますが、「データに基づく言語研究」というのが全体を貫くテーマになると思います。さまざまな分野、領域に関して行っていくということになると思います。同時に、その中から発展性のあるものを幾つか取り出して、並行して第4期に向けた計画を立てていくということになるかと思っています。

## 2. 国語研の言語学研究

(立本) これから、そういう抱負に基づいて国語研を運営していただくわけですが、そのときに、独立行政法人のころと、大学共同利用機関法人になった現在とのミッションの違い、それを簡潔に言えば、国語研究か言語学かということになるとおもいますが、その辺をご説明いただけますか。今、研究所としては国立国語研究所という言葉を使っていますが。

(田窪) 影山前所長は、本当は言語学研究所という名称にしたかったのかもしれないですね。国語というと、ちょっと狭すぎる。

例えば日本語学会は、前は国語学会とっていたのです。日本語を相対化して世界の言語の中で日本語をみようという日本語学会派と、いわゆる文献に基づいた「国語」としての日本語研究を強く主張する国語学会派との対立があって、それで会員の投票によって日本語学会に変えたのです。そのときに、日本語を相対化してしまうのが嫌な何人かの人には辞めたと聞いています。国語研はどうすべきか、という議論には、私自身が加わっていないので、どう申し上げていいかわからないですけども。

(立本) 国語研は、いろいろな調査をされてきて、データといった資産があるわけで、そのデータの一部はコーパスとしてずっと提供し続けていますね。国語研の言葉自体の、あるいは言葉の制度のような調査研究や、言語学の調査研究について、ご紹介いただけますか。



(田窪) 国語研の、例えば60年代の研究に、『話しことばの文型(1)』(国立国語研究所報告 第18、1960年)というのがあります。これは非常に理論的なものです。例えば南不二男先生(注1)は、彼独自の言語理論を出しています。それから50年以上たっていますが、いまだにその理論に基づいて研究が積み重なっていて、やっと世界の言語学が彼の研究に追い付いたという感じですね。今、非常に盛んに行われているような、階層構造に基づいた言語研究も、南先生が『話しことばの文型(2)』(国立国語研究所報告 第23、1963年)において積み重ねた理論的研究に基づいて、日本でも、世界でも研究されています。私自身も、それに関して幾つか論文を書いたことがあります。

(立本) ぜひ、そういった70年の歴史、伝統という面を、田窪所長のリーダーシップの下で発掘して、発信していただければと思います。

(田窪) そうですね。例えば柴田武先生(注2)や徳川宗賢先生(注3)といった言語学の先生方が中心になって、全国調査をやって作られた方言文法地図や単語地図といった言語地図がたくさんあります。今、それをデジタル化して、新しい比較言語学的資

料を作って、それに基づいて、近代的な生物学に基づいた系統関係の証明に使うという研究があります。データの蓄積がないとできなかった研究で、国語研のデータの収集量というのは、ものすごいものです。

(立本) そうですね。ものすごく古いものもあり、素人目にも素晴らしいと見えます。

(田窪) でも、全データのほんの一部しか公開されていないのです。今でも整理している最中です。

(立本) いつごろからデジタル化を始めているのですか。

(田窪) もう、ずっとやっています。70年間の歴史の最初のころから、コンピューターと統計を使ってやっていました。理系の計算機科学の方を雇ってデジタル化するというだけでなく、計算、統計など、文理が完全に融合したようなことを、ずっと大昔からやっているのが国語研ですね。

(立本) そういうふうな下地があって、今、情報学や何かとの共同研究とか、プロジェクトもやっておられるのですね。

(田窪) そうですね。統数研との共同研究は、非常に古くからあるはずですね。方言調査に関する計画、データ処理を統数研と一緒にやっています。

(立本) 国語研の方言研究はどのような発展の方向性を考えておられますか？

(田窪) 方言の研究では基本的に、方言を一つの言語として見て記述しています。日本には方言が1000単位であるのですが、それぞれ一つの言語体系としてみるというのが言語学的な立場です。それはいわゆる方言学とは違うのです。

方言学は対照言語学的にやるので、日本語共通語みたいなものが基準にあって、それとの違いでみるのですけれども。国語研で言語学的な態度が取れるかは、ちょっと分からないですけれども、今の若い人はそういう訓練を受けています。例えば一つの地域に入れば、その言語全体を記述する。辞書を作って、文法書を作って、テキストを作る。それをデジタル化した資料を作る。音声も映像も録画する。そういった総体で一つの言語を記述する。

さらに方言研究は、危機方言、危機言語という視点があるので、単に記述するだけでは済まなくて、もし地方のコミュニティが、方言を活性化させたいというのであれば、そのお手伝いをする。そのための手法を研究するということがあります。

今の国語研のミッションは、どちらかといえばそちらの方に軸足を移しつつありますね。若い言語研究者は、実はみんないわゆる方言学ではなくて言語学の訓練を受けていますので、完全に言語を体系的に記述するのと同時に、言語活性のためにどうしたらいいか、コミュニティと一緒に考えているような人たちが、たくさんいますね。



### 3. 国語研の日本語教育

(立本) 日本語教育とか、教育方法自体の研究というのは、いろいろな大学や研究所で取り組まれている状況で、大学共同利用機関として、国語研では何が柱になるとお考えですか？

(田窪) 今、国語研でやっている日本語教育は、教育方法の研究とかではなくて、外国人の話す日本語の特徴を抽出して、それを研究として行って、その成果を日本語教育に生かすという形です。それともう一つは、教科書に出てくる日本語ではなくて、実際にわれわれがしゃべっているリアルな日本語を取り出して、実際の日本語教育に生かすということもやっていますね。外国人の話す日本語、あるいは外国人が学ぶべき日本語、それと、外国人が日本語を学ぶときに、どういうところが難しいのかということを経年的に研究するという、基礎研究に近いものです。それは国語研以外では、多分どこもやらないですよ。日本語教育を実践している人たちは、そういう余裕はないですからね。日本語教育は非常に疲れるのです。

(立本) 先生は、韓国で日本語教育をされていましたね。

(田窪) 韓国で2年、神戸大で8年、合わせて10年です。日本における日本語教育では、外国語が使えないのです。インドネシアと中国とアメリカの生徒がいたら、アメリカの人には英語で、中国の人には中国語で、インドネシアの人にはインドネシア語でしゃべるということはできないでしょう。ですから、日本語だけで日本語教育をしないといけない。どうやって、まだ習っていない日本語を通じさせるか。上手な先生方はいろいろな工夫をされるのですけれども。

(立本) 大変なご苦勞をされて（笑）。

(田窪) それで今ちょっと考えているのは、岡崎の[生理学研究所](#)との共同研究です。ものが通じるということは、言葉で通じているのではなくて、しゃべる前にある程度、了解して通じ合って、ラポール（相互信頼の関係）が成立していて通じ合うので、そのメカニズムを生理研の脳科学者と一緒にやれないかと計画しているのです。



### 4. 大学共同利用機関としての方向性

(立本) そうですね。今は機構外の研究機関との連携が求められていますが、機構内の他機関との連携というのは、どのように考えられているのですか。

(田窪) どれくらい連携できる部分があるのか、まだ模索している段階ですかね。今、国文学研究資料館（国文研）とは幾つか協力関係がありますよね。国語研には文献を扱っている研究者がおりますので、国語研のデータベースから国文研の文献データベースの画像の部分にアクセスするといったリンク関係があります。あとは、国際日本文化研究センター（日文研）とはもっと



深く協力してもよさそうなのですから。

(立本) そうですね。私も今、それを次に聞こうかなと思っていたのですけれども。

(田窪) 私自身が国語研に入る前には、日文研の、思想としての国語に関する研究会に出ていました。

(立本) どの研究者が主催していたのですか。

(田窪) 長田俊樹さん(注4)です。以前は総合地球環境学研究所(地球研)にいらした方ですので、地球研と連携した研究プロジェクトを持っていました。実は、私の京都大学のころの言語学の学生は、いまだに地球研で研究会をしているのですよね。その学生は記述言語学研究会というものを作って、日本語だけではなくて、いろいろな危機言語の記述とかをしています。地球研の先生方にご協力いただきながら、研究会は今でも続いています。

(立本) そうですね。大学共同利用機関は、そのようなダイナミックな連携がなければいけないですよね。

(田窪) あとは、国立民族学博物館(民博)とも協力関係があってもよさそうですね。最近は民博にも言語学の研究者も結構いるので。

(立本) 大学共同利用機関というのは、大学等との連携だけではなく、先導的 COE として大学等を引っ張っていくというミッションが私はあると思います。国語研の場合は、例えば、どこの大学でも日本語学や語学の専攻、研究科があるわけですよね。そのような中で、この国語研がどのように先導的 COE としてやっていくか。その辺は、どのようにお考えになりますか。

(田窪) 今、国語研の専任、共同研究員とか研究協力者は総勢で 650 人ぐらいいるのですけれども、そのうち半数以上は他の大学の研究者です。だから、それぞれのプロジェクトで、いろいろな領域で、他の大学の人を巻き込んで合同調査をしています。例えば木部暢子のところだと、学生など若い人たちも調査に参加して、聞き取り調査などの訓練をすると同時に、プロジェクトとしていろいろな危機方言、危機言語の研究をしています。このような取り組みは、個別の大学だと結構、難しいので。

(立本) 国語研は世界に誇れるデータが蓄積されていますので、その利点、優位性を積極的に発信していただきたいです。田窪所長、本日はありがとうございました。

(注1) 南 不二男:元国立国語研究所日本語教育センター長。『現代日本語研究』(三省堂、1997年)、『敬語』(岩波書店、1987年)、『現代日本語の構造』(大修館書店、1974年)など。

(注2) 柴田 武:東京大学名誉教授、埼玉大学名誉教授。国立国語研究所の研究員(1949～64年)として日本言語地図の調査にとりくみ、言語地理学的研究成果を多数発表した。『日本の方言』(岩波書店、1958年)、『新明解国語辞典』(編纂、三省堂)など。

(注3) 徳川 宗賢:元学習院大学教授。柴田武らについて糸魚川調査に参加し、『日本言語地図』作成に携わった。『日本人の方言』(筑摩書房、1978年)、『日本語研究と教育の道』(明治書院、1994年)など。

(注4) 長田 俊樹:総合地球環境学研究所名誉教授、国際日本文化研究センター客員教授。言語学、特にムンダ語研究。『新インド学』(角川選書、2002年)、『インダス文明の謎:古代文明神話を見直す』(京都大学出版会、2013年)など。



## Vol. 025 そうだ人文機構、行こう

### ー 外来研究員オレグ・ベネシュさんの場合

人間文化研究機構（人文機構）では、2007年に英国の助成機関である、[芸術・人文リサーチ・カウンシル（AHRC）](#)と覚書を締結し、日本研究を志す英国の大学院生や若手研究者を本機構の研究機関で受入れて、研究指導を行っています。今回は、[国際日本文化研究センター（日文研）](#)で受け入れたオレグ・ベネシュ氏に、ご自身の研究活動や外来研究員としてのご経験についてお話を伺いました。オレグ氏は、現在、英国のヨーク大学で准助教として東アジア史を教えています。

#### 現在の研究課題や取り組んでいるプロジェクトはどのようなものですか？

最近、近代ナショナリズムの形成における前近代的なシンボルや思想の利用に関心があります。これまで、19世紀後半から20世紀初頭を扱った研究を多く行ってきました。最初の著書「*Inventing the Way of the Samurai（武士道の創出）*」（オックスフォード大学出版、2014年）では、近代日本における武士道の発展過程についてみました。そして、ペンシルベニア州立大学のラン・ツヴァイゲンバーグ氏と共著で、2冊目の著書を書き上げたところです。内容は、1860年代から現在までの近現代における日本の城の歴史です。

これらの2つの研究に関連したプロジェクトをいくつか進めるかたわら、国際的な比較研究の視点から、日本、中国、西洋における「過去」の利用についても注目しています。19世紀から20世紀に見られたナショナリズムの広がりには世界的な現象であり、一般的に考えられている以上に類似した方法で、多くの社会が過去を利用しました。例えば、明治期の日本で醸成された理想の武士倫理は、英国のビクトリア朝の騎士道観や「ジェントルマンシップ」いわゆる「紳士のふるまい」の影響を強く受けていました。

#### この研究分野に関心を持ったきっかけは何ですか？

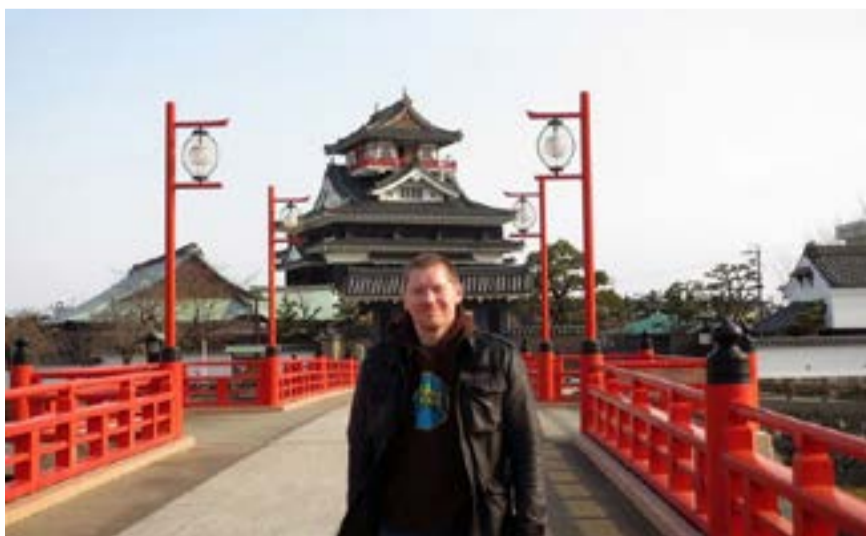
過去に数年間日本に住んだ経験があり、その間に見聞きしたことについて、いろいろと疑問がわいてきて、歴史に興味をもつようになりました。私が疑問を抱いた武士道の起源については、既存の研究成果では満足のいく回答が得られないと思ったのです。このことが大学院の修士や博士課程で、武士道の発展について研究を志すきっかけとなりました。

お城に関する研究は、数年前に東京で、ラン・ツヴァイゲンバーグ氏と意見交換したことがきっかけです。私たちは、日本の城の近代の歴史についてほとんど知られていない、という結論に至ったのです。これまでの研究も博物館での展示でも、そのほとんどが城の古い歴史に焦点をあてたものだからです。

深く掘り下げていくと、城が日本近代の発展に大きな役割を果たしていただけでなく、日本の城を取り巻く力学には、ヨーロッパや他の地域と多くの共通点があったことに気づきました。武士道と城、双方の歴史は、近代における地方、地域そして国家のアイデンティティの形成と密接に関連していて、まさに私がこれまで扱ってきた研究テーマと合致します。

#### 5年後、そして10年後、あなたは何をしていると思いますか？

過去を扱っている歴史家としては、自分自身についても、そして私の研究分野についても、あまり未来の予測に左右されないようにしています。とはいえ、多くの研究プロジェクトに取り組んでいるので、その研究が続けられれば、うれしいです。



#### 外来研究員として日本に滞在し、最も記憶に残った出来事は何でしたか？

桜の季節がすばらしかったことが最も印象的でした。幸運なことに、例年よりも2018年春の桜の時期は長く、お花見のピークの時期に、城址の調査旅行ができたのです。

多くの都市では、城は城址公園として公開されており、数十、数百の桜が植えられています。ですから、雰囲気は最高でした。桜の下でブルーシートを広げて食べたり飲んだり、宴会をしている人達の間をぬって、歴史的な事物の調査をするというのはちょっと奇妙な感じでしたが、この経験が、さ

らに思い出深いものにしたのは確かです。

## 外国で研究しようとしている学生や若手研究者にアドバイスをお願いします。

外に出て、可能な限り探検すること、これに尽きます。どこで新たなアイデアやプロジェクトに出会えるかわかりませんから！

オレグ・ベネシュ 准教授

ベネシュ氏は、英国のヨーク大学の東アジア史の准教授です。ロンドン大学のSOASのアソシエイト研究員、歴史学研究所のフェローも務めています。ベネシュ氏はカナダのブリティッシュ・コロンビア大学のアジア研究科で博士号を取得しました。ベネシュ氏は、知識、文化、社会史が交わる事象に関心があります。特に、思想や概念がさまざまな社会間を行き来し、発展することに興味を持っており、日本、中国、西洋の間が相互に与えた影響に焦点を当てて研究をしています。ベネシュ氏の研究については、[www.olegbenesch.com](http://www.olegbenesch.com) もご参照ください。

ベネシュ氏は、オフは家族や友人と一緒に過ごしたり、行ったことのない地域の探検や、サッカーを楽しんだりしています。京都滞在中には、自転車で街中や郊外をサイクリングしていました。郊外や遠くの都市を探検する方法として、行ったことのない地域に向かってできるだけ遠くまでランニングし、電車を乗り継いで帰宅していたそうです。またベネシュ氏は、定期的に京都大学や日文研の近くのフットサル場で職員や学生たちとサッカーをしていたそうです。経験上、とりわけ初めての土地に着いたばかりの時は、サッカーを通じた交流は多くの人と知り合うための最善の方法といえます。



## Vol. 026 そうだ人文機構、行こう

### ー 外来研究員ランス・パーシーさんの場合

人間文化研究機構（人文機構）では、2007年に英国の助成機関である、芸術・人文リサーチ・カウンシル（AHRC）と覚書を締結し、日本研究を志す英国の大学院生や若手研究者を本機構の研究機関で受入れて、研究指導を行っています。今回は、2017年度に国立民族学博物館（民博）で受け入れたランス・パーシーさんに、ご自身の研究活動や外来研究員としてのご経験についてお話を伺いました。パーシーさんは現在、英国のバーミンガム大学の中世史コースの博士課程に在籍しています。

#### 現在の研究課題や取り組んでいるプロジェクトはどのようなものですか？

私は中世における中国と北東アジアの社会的アイデンティティについて研究をしています。学位論文や現在進めている研究では、中国の遼王朝（907-1125年）の墓碑に刻まれている文面に注目しています。銘文に書かれている要素だけでなく、墓碑がどのような状態で何と一緒発掘されたかなどの考古学的な側面もできるだけ考察に取り入れています。

日本に滞在している間、中国史が日本においてどのように学ばれ、研究されているかということに興味を持ちましたので、今後、プロジェクトとして発展させていきたいと考えています。

#### この研究分野に関心を持ったきっかけは何ですか？

私は学部時代に、中国語と日本語を専攻していました。その後、中国の古典に興味を持つようになりました。もともと哲学書を読みたいと思っていたのですが、読み進めるうちに、哲学書が書かれるに至った歴史的背景にも徐々に興味をもつようになりました。そして、中国四川省の四川大学で、宗教学の修士課程に進学して、道教に着目するに至ったのです。

修士課程を終える頃、幸運なことに、歴史学的な研究手法と考古学的な研究手法を組み合わせた、素晴らしい研究プロジェクトに出会い、大学院生としてこのプロジェクトに参画できることになりました。それまでは、宗教的な哲学書や思弁哲学の書物漬けの数年間だったので、とても新鮮に感じました。

墓碑文への興味は、碑文の文面を分析したいという動機と、碑文の物質的、社会的な文脈への関心が合わさっています。中国の他の王朝と比べると、遼王朝から受け継がれてきた史資料は多くありません。遼王朝の市民の生活を理解するうえで、20世紀以降の考古学的な発見が、重要な役割を果たしてきたのです。

これまでの多くの先行研究は、遺物と史料の双方を組み合わせ、遼王朝の全体像を描きだそうとしてきました。遺物と史料を個別に調査したときに、それぞれに基づいて異なった遼社会が描きだされるのか否か。史料と歴史学的な研究手法の限界について考えさせられるのではないかと期待しています。

### 5年後、そして10年後、あなたは何をしていますか？

5年後、10年後というのはあまりに先のことで、自分がどうなっているのか想像できないのですが、これまでのように中国の古典を読み、研究活動を通して習得してきたアジア諸国の言葉を使っていたと思います。教育現場、出版、あるいはその他の媒体でもかまいませんが、これまで得たものを共有できる機会に恵まれればと思います。

今回の外来研究員という経験を通じて、今後、手がけてみたい研究プロジェクトや国外で研究する可能性について、気づきを得ました。博士号を取得したら、ポスドクとして日本に戻ってこれないかと真剣に考えています。

### 外来研究員として日本に滞在し、最も記憶に残った出来事は何でしたか？

東京にある東洋文庫を訪問したことです。職員が非常に協力的で、礼儀正しく、専門性が高く、素晴らしい図書館でした。東洋文庫では、遼王朝の碑文を写し取った拓本を手にとって調査することができたのです。拓本は、1930年代に日本の考古学者によって製作された、あるいは購入されたものでした。いくつかの資料は、もろく複数の紙がテープで貼り合わせてあり、所在が一世紀ちかく知られていなかった碑文の写しだったのです。

これらの碑文を教員や学生達とともに読むワークショップを早稲田大学で開催する機会を得ました。東洋文庫の拓本は、非常にアクセスしやすく、ワークショップの参加者自身が実物を手に取ることもできるという話をしました。

それはさておき、日本の博物館は素晴らしいです！私の受け入れ先だった国立民族学博物館では、過去、そして現在の民族についての考え方や、私の研究に人類学的な枠組みの取り入れ方といった、新鮮な視点が得られました。また、幸いにも、出光美術館の「神秘のやきもの 宋磁」展や大阪市立東洋陶磁美術館の「唐代胡人俑—シルクロードを駆けた夢」展などの素晴らしい展覧会が開催されており、観ることができました。私の研究にも関連する展覧会もありました。このほかにも、東京国立博物館の「仁和寺と御室派のみほとけ」展や、大阪市立美術館の「江戸の戯画」(江戸時代の漫画)展、江戸東京博物館の華麗な常設展示などは、博士論文で扱っている研究テーマを超えて、私の興味関心が広がるきっかけをくれました。

### 外国で研究しようとしている学生や若手研究者にアドバイスをお願いします。

とにかく、挑戦してみてください。想像を超える学びがあることは間違いありません。受け入れ先が人文機構の研究機関に決まったら、滞在中は、できるだけ外出して人と会うようにするのがいいと思います。

はじめ、日本での滞在中は、日本語で書かれた資料をひたすら読むことになるだろうと想像していました。ですが、日本での生活が始まったころ、論文や書籍の著者に積極的に連絡をとって、セミナーに参加することを勧められました。

こういったアドバイスのおかげで、中国学や歴史学の研究が、単に紙の上だけではなく、日本の研究者がどのように進めているのかを肌で感じることができました。無機質な私の研究(墓碑文を扱っています)を、生きている人々と関わりを持ち、生きた日本の伝統的な中国学と関わりをもつものへと変えてくれたのです。

#### ランス・パーシーさん

ランス・パーシーさんは、英国のバーミンガム大学の博士課程に在籍中で、ナオミ・スタンデン教授の指導のもと、中世史を学んでいます。パーシーさんはシェフィールド大学で中国研究(副専攻:日本語)を学び、中国の四川大学で唐時代の道教思想について修士論文をまとめました。

パーシーさんは、AHRCの研究プロジェクト「北東中国の前近代史(200-1200)における都市の理解」に大学院生として参画しています。博士論文の研究テーマは、遼(北東アジア)の叙事詩、歴史地理学、都市社会で、情報地理学(GIS)、データベース設計、考古学そして歴史を組み合わせた研究を行っています。パーシーさんは2019年に博士課程を修了する予定です。2018年1月から6月まで、国立民族学博物館に外来研究員として滞在しました。

滞在中、週末や夕方に合気道の練習に励んでいました。また、長い時間散歩にいたり、高槻や茨城といった、大阪の北部の小さな町を訪れたり、していました。おいしいお茶とチーズケーキが味わえる小さなカフェをいつも探しながら散歩を楽しんでいました。





## Vol. 027 そうだ人文機構、行こう

### ー 外来研究員ジョー・マッカラムさんの場合

人間文化研究機構（人文機構）では、2007年に英国の助成機関である、芸術・人文リサーチ・カウンシル（AHRC）と覚書を締結し、日本研究を志す英国の大学院生や若手研究者を本機構の研究機関で受入れて、研究指導を行っています。今回は、2016年に国際日本文化研究センター（日文研）で受け入れたジョー・マッカラムさんに、ご自身の研究活動や外来研究員としてのご経験についてお話を伺いました。マッカラムさんは現在、オーストラリアのクイーンズランド大学木質構造未来センター（Centre for Future Timber Structures, University of Queensland）の博士課程に在籍しています。

#### 現在の研究課題や取り組んでいるプロジェクトはどのようなものですか？

私は、建築家や籠作家としての教育や指導を受けてきたため、工芸と自然の関係、特に編み込みや自然がつぐむ構造（対称図形や螺旋、六角形、分岐など）で見られる共通のパターンや造形に関心を持っています。伝統工芸や設計の技術とともに、フィルムや写真、3Dモデリングも併せて使用しています。そして、現在、籠細工と生物学的な構造や形態の成長の共通点について研究しています。

自然のつぐむ構造と、日本の竹の編み込み技法やその伝統を比べてみると、新たな物理的、デジタル的な建築方法が見えてきます。坂茂氏が設計したフランスのラ・セヌ・ミュージカル（La Seine Musicale）のような、木材を組み上げた大きな構造物を想像してみてください。私はこういった建築物に用いられる技術やパターン、造形を収集して、記録して、言葉として書き起こしています（パターン生成言語）。

#### この研究分野に関心を持ったきっかけは何ですか？

2011年に結婚式に参列するためにサンフランシスコを訪れたのがきっかけです。この時、数日間、市内の博物館やギャラリーを探索する機会に恵まれました。そして、デ・ヤング美術館（de Young Museum）で新しい方向性を見つけたのです。それはとても感動的な経験でした。

複雑で、多様にうねる曲線の影が壁に映っているのが目に入りました。そして角を曲がると、本田聖流（ほんだしょうりゅう）作の「オーロラ」（2006年、材質：真竹、籐）が目飛び込んできたのです。私はすぐにこの作品を、その用いている技法を建築のモデリングという点で観察しました。

デ・ヤング美術館から、アジア美術館に行き、そこでコッツェン・コレクションを見ました。コッツェン・コレクションは、慈善家のロイド・コッツェン（Lloyd Cotsen, 1929 - 2017）氏がアジア美術館に寄贈した、バスケットや彫刻造形物のコレクションです。私は英国に戻り、日本の竹工芸を研究し始め、また籠製作に関する国家資格を2年間で取得しました。

#### 5年後、そして10年後、あなたは何をしていると思いますか？

博士課程を修了し、私の実務研究や日本の竹工芸の作品に関する調査をもとにした本の出版に取り組んでいたいと思っています。こういった、特異な分野の工芸家は、膨大な知識と高い技能をもっています。しかし、多くの実学がそうであるように、その知識や技能が次世代へ伝承されないまま途絶えてしまっています。私の研究や活動を通して、英国とオーストラリアの両方でこういった竹工芸の知名度を高めていきたいと思っています。

そして、長期的に協力していきたいと思っている多くの工芸家や団体があります。ですから、現在、研究者や建築専攻の学生、竹編職人を一同に集めた、共同プロジェクトを実施するための助成金を得たいと考えています。

#### 外来研究員として日本に滞在し、最も記憶に残った出来事は何でしたか？

難しい質問ですね。外来研究員としての4か月間は、信じられないほどの幸運とチャンスでいっぱいだったからです。京都での生活は、これまで経験したことがないほどの自由なものでした。探検する時間と空間が存分にあったのは、すばらしかったです。

指導教員の山田奨治教授のほか、パトリシア・フィスター教授や大石真澄大学院生（当時）など日文研のスタッフの皆さんに全面的に支援していただきました。また、日文研の図書館は大規模で、すばらしいスタッフが常駐しており、こもって多くの本を読みました。セミのセラナーデを聴きながら、小さなアパートの中の机の上でモデルを作り、お好み焼きを食べて過ごすこ

とが日常茶飯事でした。

九州の別府でのフィールド調査では、想像以上の成果が得られました。この調査では、私は3人の工芸家と会う予定でしたが、最終的には17人と会うことができました。とても幸運なことに、米澤二郎氏、大谷健一氏、清水貴之氏ら、3人の非常に寛大な工芸家たちに案内していただき、彼らもつ専門的な知識をご教示いただきました。さらに、私を自宅やワークショップ、そして彼らのコミュニティに招待してくださいました。さらに米澤二郎氏は、2016年に東京で開催された日展に招待してください、本間秀昭氏をはじめとする多くの偉大な作家たち（人間国宝の生野祥雲斎を父にもつ生野徳三氏）を紹介してくださいました。

「新しい発見にあふれ、豊かなものでした」、という言葉で表現してしまうのはもったいないほど、この滞在は間違いなく、人生の中で最高の時間でした。

### 外国で研究しようとしている学生や若手研究者にアドバイスをお願いします。

IPSへの応募を考えているなら躊躇せず、今すぐに応募の準備を始めましょう。

私はそれほど日本語が堪能ではありませんが、むしろ堪能からほど遠かったのですが、「かごを編む」という行為自体が工芸家の人たちと交わる上での「共通のことば」でした。たとえ、日本語がうまく話せなくても、応募をあきらめないでください。あなた自身が相手と意思疎通できる「ことば」を探してみてください。とはいえ、日文研の図書館では、多くの珍しい英語の本を見つけましたし、日文研の図書館は最高でした。

出発前に、積極的にできるだけ多くの紹介状（きちんとした翻訳をつけて）を準備しておきましょう。オープンになって、たくさんの人と話し、あきらめず、Google翻訳を必要に応じて活用してください。思わぬ出会いが、あなたの活動に関心を示す人に導いてくれたり、あなたを他の人に紹介してくれたりするでしょう。そしてあっという間に、日本があなたの懐に飛び込んでくると思います。

日本滞在中の計画は細かく立てましょう。有効なビザがあることを確認したうえで、さらに英国の日本大使館でも確認しましょう。JRが旅行客用に販売しているJapan Rail Passを予算内で、できるだけ長期に使えるものを買きましょう。日本での下宿先は、早めに予約しましょう。日文研の宿泊施設の使用料は非常に合理的な価格ですので、節約してAHRCから支給される奨学金を調査費用に回しましょう。荷物はできるだけ軽くするのがいいと思います（日本で新しい本に出会うからです）。日本の郵便局から荷物を送るのは簡単で手頃なので、研究資料や書籍、物、道具など買って帰りましょう。写真を撮って、毎日、あなたの滞在中の様子を記録するのがいいと思います。

そして、日本に到着したら、細かいことはすべて忘れて、研究に没頭してください。研究という旅に身をゆだねましょう。



別府調査 01: 造りかえられた自然環境の探求  
デジタル写真のレンダリング ジョー・マッカラム  
(1975年ジンバブエ生まれ)

ジョー・マッカラムさん

ジョー・マッカラムさんは、博士課程の大学院生で、異分野融合的な研究を行っている実務家研究者です。英国のロンドンを拠点に活動しています。2016年後半に、芸術・人文リサーチ・カウンシル（AHRC）の大学院生・若手派遣事業（International Placement Scheme）の外来研究員として京都の国際日本文化研究センター（日文研）に4か月間滞在し活動していました。この間、マッカラムさんは日本の竹工芸における情動と環境の関係を研究し、滞在中に竹工芸家や木工芸家、建築家との幅広いフィールド調査を行いました。

マッカラムさんは、現在、オーストラリアのクイーンズランド大学木質構造未来センターで博士号を取得しようとしています。博士号のための研究は、AHRCが支援する3D3プログラムにて開始しました。マッカラムさんはまた、FoAMのメンバーでもあります。FoAMは、非営利団体で、芸術、科学、自然、そして日常生活が交わる学際的な実験の場です。

マッカラムさんは、2001年、クイーンズランド大学建築学部を優等学位（first class honours）で卒業しました。また、籠製作の国家職業資格（NVQ）を有しており、それは英国におけるこの種の資格の最後の認定でした。この17年間、マッカラムさんはロンドンで暮らし、勤め、建築、芸術、工芸、政策策定など幅広い分野での経験を積んでいます。

Instagram [@thefabricatedframe\\_](#)

Twitter: [@fabricatedframe](#)



## Vol. 028 年号と改元についておさえておきたい5つのこと

「平成最後の夏」、「平成最後の〇〇」という表現を耳にすることが多くなりました。天皇陛下が来年（2019年）の4月末に退位されて、5月に皇太子徳仁親王が即位されると「平成」が終わり、新しい「年号」が始まります。皆さんは、年号が千年もの間、中国の古典に由来して名付けられてきたこと、年号を改める「改元」には、リセットする、という意味が込められていたことを知っていますか。

平成の終わりを迎えるにあたり、これだけは知っておきたい年号にまつわる事柄を中央大学文学部の水上雅晴（みずかみ・まさはる）教授に聞いてきました。



### 年号とはなんですか。

自分の子供の健やかな成長を願って名前をつけるように、日本では時に名前をつけます。このつけた名前を年号と呼びます。日本では1300年以上、途絶えることなく、年号が使われています。

もともと中国の漢（紀元前202～220年）の時代に、誰が主権者であるか、その時の治世者をアピールするために使われはじめました。その風習が日本にもわたり、中国とは別の独自の年号を自分たちでつけるようになったのです。

### 「平成」、「昭和」、「大正」と年号を遡ると漢字二文字です。年号は漢字二文字でなければいけなかったのでしょうか。

いえ、そんなことはありません。天平の時代（729～749年）には「天平感宝」や「天平勝宝」と漢字四文字で名付けられていたこともありますので、漢字二文字でなければいけなかった、という決まりはありませんでした。しかし、漢字二文字を使う方式が長く踏襲されて現在に至っています。

### 年号を変える改元は、天皇の即位に合わせて行うものなのですか。

明治時代以降は、「一世一元制」といって、天皇の即位に合わせて、改元がなされるようになりました。中国では、明の時代（1368～1644年）からはじまった方式で、日本でも取り入れられました。

しかし、江戸時代までは、天皇の即位以外の理由でも名前をどんどん変えていたのです。たとえば、天災が続いた場合には、縁起が悪いのでリセットするために、年号を変えることが珍しくありませんでした。



「年号勘文」(写) (広橋家文書) (国立歴史民俗博物館所蔵、室町時代 H-63-383-3)  
大永8年(1528年)8月20日の年号勘文の写し

新しい年号は、どのように決められてきたのでしょうか。

現代の決め方については、情報が限られているのでそれほど詳しくはわかりませんが、数名の有識者に案を出してもらい、ふるいにかけるための議論を行って、決めるというのは今も昔も変わらないと思います。

平安時代中期以降の決め方について紹介すると、朝廷内には文章博士家（もんじょうはかせ）と呼ばれる家がいくつかありました。文書博士は、漢文で書かれた中国の古典（漢籍）の専門的な知識を持っている役人で、中国古典学の大学教授のような有識者です。

新しい年号を決める際、文章博士たちから、年号の案とその典拠となる漢籍の一節を書いた文章（年号勘文、ねんごうかんもん）が提出されて、どの案がよいかという議論、難陳（なんちん）がなされていました。

公卿が行った難陳の議論は、先例を重視するもので、不吉なことがあったときの文字だから使わない、この文字には悪い意味があるから避ける、といったことが話し合われました。議論の結果、残った候補年号が天皇に報告され、採用されます。

**「平成」は、国内外、天地の両方が平和であれという願いが込められて、『史記』と『書経』の二つの漢籍を引用したと言われています。年号は必ず漢籍を引用してきたのでしょうか。**

そうでもありません。たとえば、珍しい亀を見かけた、というような縁起のよいできごとがあったので「霊亀（れいき）」と名付けられた時代もあれば、銅が取れたので、「和銅（わどう）」と名付けられた時代もありました。年号が使い始められた時の年号は、漢籍の出典を持っていなかったようです。

しかし、年号の先例が蓄積されて、先ほど紹介したような年号の決め方が定式化してくると、漢籍の引用が必須になったと考えられます。当時、圧倒的な先進国であった中国が漢字を使っている。そのような漢字を使って書かれているありがたい漢籍に由来するのであれば、その年号にお墨付きがつく。こういう発想で、漢籍を引用したのです。

余談ですが、次の年号は、中国の書物だけではなく、日本で書かれた書物（国書）も引用したものになるのではないかという報道を見ることがあります。実は最近、江戸時代の難陳の議論を調べていて、年号案の正当性を裏付ける一つの根拠として、『日本書紀』が用いられた事例を発見しました。

そういう意味では、次の年号で国書が引用されることも十分に考えられます。将来的に、「平成」以降の年号は必ずしも漢籍の引用が必須ではなくなるかもしれませんね。これまでも漢籍の引用が当たり前になったり、天皇の即位の時だけ改元されるようになったりと、年号の決め方は変化してきましたから。



次の年号が国書を引用したものであれば、年号の出典が移り変わる“とき”、年号と改元の歴史の転換点に私たちは立ち会うことになるのかもしれませんが。

聞き手：高祖歩美



中央大学文学部教授 水上 雅晴

専門分野は中国哲学。清代の考証学を中心とする研究を行っている。北海道で生まれ育ち、北海道大学文学部、同大学院文学研究科博士前期課程修了、同博士後期課程単位取得退学後、北海道大学文学部助手・助教、琉球大学教育学部准教授・教授を経て2015年より現職。

関連リンク：

- 国立歴史民俗博物館 特集展示「年号と朝廷」（2017年9月12日（火）～10月22日（日））
- 歴博国際シンポジウム「年号と東アジアの思想と文化」（2017年10月21日（土）～22日（日））
- 歴史系総合誌『歴博』（特集：年号と朝廷、第208号2018年5月30日）





## Vol. 029 第2回 AHRC 関係者懇談会

2018年9月3日（月）の午後に人間文化研究機構の本部会議室で第2回 AHRC（英国の助成機関である [芸術・人文リサーチ・カウンシル](#)）関係者懇談会を開催しました。話題は、映画の中で描写された都市、東京、現代の神社、芸術祭や近代の日本詩に及びました。

シンガポール国立大学建築学科の助教 [Simone Shu-Yeng Chung](#) 氏は、博士号取得のために行った研究の一部について、話題を提供しました。博士論文の中では、台湾のホウ・シャオシェン（Hou Hsiao-hsien）監督が映画の中で描いた東京がどれほど実在する都市、東京を忠実に描いたものかを調べた Chung 氏。題材にしたのは、ホウ・シャオシェン監督の映画「珈琲時光（2003）」で、主人公が東京を舞台にさまざまな場所を訪れながら物語が展開する映画です。

Chung 氏は、たとえば、主人公が生活するアパートの部屋の様子を映画のシーンだけを用いて再構成したり、主人が通勤したり、電車で移動したりするシーンに基づいて、東京の地理的な心像を再構成しました。どちらもその全体像は映画の中では、描かれていません。この再構成には、建築家の今和次郎が残したスケッチを参考にしました。手書きのスケッチで農家の台所のように特定の空間が、ある一日の中で経時的にどのように使われるかを、今は著書『今和次郎集〈第5巻〉生活学（ドメス出版1971）』の中で可視化しています。このようなスケッチのアイデアを取り入れて、再構成した東京の地理的な心像は、山手線が中心になるもので、旅行者の多くが東京という都市を、山手線を中心に把握するのと類似していると話しました。

東京女子大学国際英語学科の准教授、[Andrew Houwen](#) 氏は、博士課程の学生として来日した経験を振り返りました。外来研究員として滞在した3ヶ月間は、学術的な成果だけではなく、現在の研究活動にもつながる芸術的かつ創造的な出会いをもたらしました。博士論文では戦後の日本詩の受容について調査した Houwen 氏。来日中、詩人・那珂太郎氏の詩集や那珂氏について書かれたさまざまな資料を収集しました。また、現在の共同研究者の一人である山口大学国際総合科学部の助教、[仁平千香子](#)氏と知り合ったのもこの期間でした。滞在中、仁平氏と意気投合し、二人は、那珂氏の詩の英語訳のプロジェクトを立ち上げました。Houwen 氏が博士課程を終わらせるためにいったん英国に戻った後も交流は続きました。そして、約5年の時を経て Houwen 氏と仁平氏は、2018年の7月にこれまで英訳してきた那珂氏の詩の一部を書籍「[Music](#)」([Isobar press, 2018](#))として発表しました。

懇談会の参加者は、プレゼンテーションで言及された内容をめぐって、観光地の人気日本人旅行客と外国人旅行客との間では異なること（たとえば、瀬戸内海に浮かぶ直島など）や建築家や芸術家の評価をめぐっては、日本と国外では評価が異なること、伝統的な「神前結婚式」は明治期に形式化され行われるようになったもので歴史が浅いことなど、多岐にわたる話題について意見が交わされ、AHRC 関係者の交流が深められました。

2009年以来、人間文化研究機構の6つの機関は、毎年、英国の大学や研究機関に在籍する博士課程の学生や若手研究者を、外来研究員として3～6ヶ月間受け入れています。この事業は、人間文化研究機構と英国の AHRC（Arts & Humanities Research Council）との連携の一環として行っています（[International Placement Scheme; IPS](#)）。これまでに25人以上の外来研究員がこの枠組みを利用して、来日し、データ収集や資料調査、フィールドワークなどを行っています。AHRC 関係者の懇談会は、これまで IPS の枠組みを利用して来日した外来研究員がつながることで、日本研究に興味を持つ学者のネットワークを作り、日本で研究を行う上での情報交換を行うことを目的としています。第1回の懇談会は、2018年2月に開催されました。





## Vol. 030 2025年の大阪・関西万博誘致に向けて知っておきたい5つのこと

日本政府は、2025年の万国博覧会（万博）を大阪の夢洲（ゆめしま）に誘致したい考えです。2018年の11月23日には、博覧会国際事務局があるパリで2025年の万博誘致のための最終プレゼンを行い、開催地として他に立候補しているロシア中部のエカテリンブルクとアゼルバイジャンの首都バクーと競います。

170カ国の投票によって決まる2025年の万博の開催地。大阪・関西万博に決まれば、1970年以来、55年ぶりに2度目の万博を大阪で開催することになります。

万博は、企業が盛んに行っている商談会や見本市と何が異なるのでしょうか。そもそもどういった経緯で始まり、今日まで続いてきたのでしょうか。京都大学大学院教育学研究科の佐野真由子教授にお話を伺いました。



### 万博とはどのような催し物ですか。

万博は、国家が開催する催し物で、外交ルートを通じて他国を招き、国単位で参加する唯一の国際社会の公式イベントです。1928年に結ばれた国際博覧会条約と呼ばれる多国間の条約に基づいて、1931年に設置された博覧会国際事務局（BIE）のもとで運営されています。

**万博は、イギリスのビクトリア女王の夫であるアルバート公の発意で1851年にロンドンで開催されたとされていますが、どういった動機で始まったのでしょうか。大英帝国の先端技術を誇示することが目的だったのでしょうか。**

いえ、最初の動機はもうちょっと純粋なものだったと見ています。万博は、非常に帝国主義的な国威発揚の場として言われることが多く、もちろん、そういった性格を帯びた時期もありました。しかし、ロンドンの万博を企画した人たちの記録をたどると、思い切って大きな展示会をやりたい、いろいろな物産を展示したいという議論がみられ、当初は「世界を知りたい、いろいろなものを持ってきて見たい、並べて展示したい、人々に知ってもらいたい」という欲求によって作られたものだと考えています。そして、世界中のものを集めて、産業の結果や最新の技術を披露し合っていたら、自然の流れとして、国威発揚につながっていった。そのように見えています。

**1851年にロンドンで始まった万博が、80年を経て国際的な条約に基づいて開催されるようになったのはなぜですか。**

世界中のものを集めて展示する、という大きなことをできるのは、経済的にも人的資源的にも当初は国家しかありませんでした。しかし、次第に民間でも同じようなことができるようになり、似たような催し物が出てきます。

当時の記録を読み返すと、万博の関係者はそういった民間の催し物、とりわけ商業的な見本市とはなんとか区別したいという意向が強かったように見受けられます。そして、きちんとした国家間の催し物として位置づけるために、多国間条約を締結して万博を制度化しました。

**日本で万博が初めて開催されたのは、1970年の大阪万博のことでした。それ以前にも日本で万博を誘致したり、開催しようとしたりする動きはあったのでしょうか。**

はい、明治時代にも一度動きがあり、そしてより本格的には、幻となった1940年の万博計画がありました。しかし、日中戦争の時期に入り、実現しませんでした。とはいえ、すでに入場チケットも販売されるいうところまで準備が進んでいたのです。そ

して、これは当時、中止と言わず、「延期」とされました。「延期」だったのですから、1940年の入場チケットを買った人たちは、そのチケットで1970年の大阪万博に入場できたんですよ。すてきな話ですよ。1940年万博については、私の共同研究の仲間である増山一成さんのご研究（写真の論集中に掲載）をぜひ参照していただきたいです。



1970年の大阪万博の様子

**1970年の大阪万博は、アジアで開催された初めての万博でした。振り返ると歴史的にどのような意味をもつものだったのでしょうか。**

万博は常にその時の国際社会の構造や課題を反映していると考えています。1960年代から70年代は、植民地が一気に独立して、地球上の国家の数がうんと増えた時期です。つまり、万博の正式開催国・参加国となる国家が一気に増えたんです。

そうした中で、かつてはイギリスの植民地であったカナダで1967年にモントリオール万博が開催され、1970年にはアジアで初めて大阪万博が開催されました。大阪万博は、「人類の進歩と調和」をテーマとして掲げましたが、まさに新しい国家が増えて、一握りの先進国が支配していた世界の様相がガラッと変わろうとしていました。これまで、日本がこの万博で先進国の仲間入りをしたという意義が強調されてきましたが、そういった国際社会の構造変化が色濃く反映された万博であるという世界史的な見方も重要だと考えています。

また、1970年の大阪万博は、現在に到るまでに日本の産業界や社会を引っ張ってきた人材の開発の機会でもありました。現在の日本を代表するようなアーティストや建築家、ファッションデザイナーは若い頃にその才能を伸ばす機会が大阪万博によって与えられた、そういったケースが非常に多くあるんです。ですから、世界が2025年の万博を大阪・関西万博に選んだ際には、万博の準備に若い人をたくさん巻き込んで、その才能が発揮できるような場所やチャンスをどんどんと与えていただきたい。21世紀の残りを背負うぐらいの人材を出すような万博にしていきたいと強く願います。



「万博には、国際社会の構造が常にかなり生々しく反映される」と佐野先生。トランプ政権が始まり、万博の創始国である英国がEU離脱を表明。他国や世界よりも自国の利益や繁栄を追求する保護主義的な傾向が強くなっています。2020年のドバイ、2023年のブエノス・アイレス、そして2025年のそれぞれの万博ではどのような世界が映し出されるのでしょうか。

聞き手：高祖歩美



京都大学大学院教育学研究科 教授 / 国際日本文化研究センター 客員教授 佐野真由子  
研究のキーワードに掲げるのは「外交の文化史」。ケンブリッジ大学で修士号（国際関係論）、東京大学で博士号（学術）を取得。国際交流基金やUNESCOで勤務したのち、静岡文化芸術大学、国際日本文化研究センターを経て、2018年より現職。『万国博覧会と人間の歴史』（佐野真由子編著、思文閣出版、2015年）は、国内外の多様な分野の研究者や博覧会現場に知悉した実務家らと2010年以来行ってきた共同研究の成果。



国内外の多様な分野の研究者や博覧会現場に知悉した実務家らと2010年以來行ってきた共同研究の成果『万国博覧会と人間の歴史』(佐野真由子編著、思文閣出版、2015年)

大阪・関西万博の詳細(予定)

会期: 2025年5月3日~11月3日

会場: 大阪府 夢洲(155ヘクタール、甲子園球場およそ100個分)

テーマ: 命輝く未来社会のデザイン

これまで日本で開催された万博

1970年 大阪万博 テーマ: 人類の進歩と調和

1975年 沖縄国際海洋博覧会 テーマ: 海—その望ましい未来

1985年 国際科学技術博覧会(筑波) テーマ: 人間・住居・環境と科学技術

1990年 国際花と緑の博覧会(大阪) テーマ: 花と緑と生活の係わりを捉え 21世紀へ 向けて潤いのある社会の創造を目指す

2005年 愛・地球博(愛知) テーマ: 自然の叡智

\*1970年の大阪万博のみが規模の大きな登録博覧会(当時の用語では一般博覧会)として扱われている。博覧会には、「登録博覧会」と「認定博覧会」の2種類があり、開催期間や会場の規模などを踏まえて総合的に判断される。2025年に立候補している大阪・関西万博は登録博覧会。



大学共同利用機関法人  
人間文化研究機構